

対談

夢喰人(ばくじん) 渡辺 勉氏

名古屋市社会福祉協議会ボランティアセンター 中村 弘佳氏

ボラみみより情報局 織田 元樹

JICAボランティア さくらの你好通信

ボラみみ スタッフ発!

連載 第2回



P.2からの続き

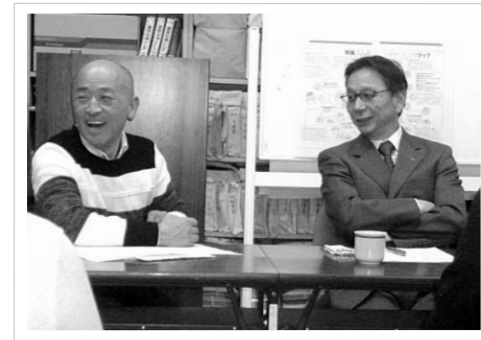
織田 ボランティア集会在終わった2003年度以降も、ボランティア活動の普及や啓発に関するイベントはありませんが、ボランティア活動者同士がつながりを深め、学び合う「名古屋市ボランティア集會」の内容とは違っていますよね。そこで、2013年度から「なごやボランティア楽集會」として、学び合いの場を復活させようと仕掛けました。その時の思いは?

中村 やはり学習と実践、両方が大事だと思いですね。名古屋市社協ボラセンとして、何が大事かという話だと思います。コーディネートだけやっていければいいということではなく、もっと調査研究的なことをやるということに名古屋市社協ボラセンの意義があると思うので。交流はもちろんだ事だけど、優先順位を考えると、交流の場より学習する場を作ることが大事かなと。名古屋市社協の仕事をしていく中で、政策提言をするとか、調査研究をするとか、それが社協らしい運営だろうなと思っていました。本当は、名古屋市社協や名古屋の地域福祉はどうあるべきかということの研究する場を作りたいかなと。それから、先進的な社協は売るための本を作ったりしています。売って、市民の目に触れるような、「社協、ここにあり」と伝えられるような本を作って、世にアピールしたいじゃないかなと感じていました。一番初めに名古屋市社協で売るための本を作ろうとしたのが20年くらい前で、それを作ったのは私です。ボランティア史もそれに近いかな。だから、本来は名古屋市社協がやるべきだったんじゃないかという気持ちにつながっているんです。

「こうありがたい」という自分の思いを大切に

織田 長い間ボランティアを見てきて、今のボランティアの状況をどんなふうに見ていますか?

中村 ボランティア集會の頃の話でしたが、当時、一番付き合ひがあったのは障がいの分野で活動しているボランティアだったけど、皆さん、本当に障がい児・者への思いが熱かったなと思うんです。それが、ボランティアが一般化して、いろいろな人がボランティアをやるようになり、参加する層が広まってきたのはいいことだけど、熱がないと言えはいいのかわ。単に「参加」する人が多くて、本当に「参画」する気持ちでボランティアをする人たちが割合としては少ないかなと感じています。積極的に参画する人の数は、たぶん増えていると思います。でも、そういう人たちの声が具体的に名古屋市社協のボラセンに伝わってきているかというと、そうではない気がします。会館ができた当初は、拠点が出来たということもあって、しょっちゅうボランティア



の人たちが来てくれて、いろいろな声を聴く機会が多かったと思います。今も拠点という意味では、いろいろな人が出入りしていますが、以前ほど直接話す機会が多くないかなと感じます。

渡辺 広まっただけに薄まったというはあると思います。自分がどうありがたい、この人にどうあってほしい、どういう社会になってほしい、そういう気持ちを活動の中で作っていくようなことが、それぞれの活動の中であまりできていないかな。行為・行動そのものではなく、そうすることでこの人の生活が豊かになった、豊かになるために自分はこうできた、豊かになってニコッと笑えてよかったということを経験した人と確かめ合うという積み重ねが弱くなっているんだと思います。行為・活動そのものは幅広く、多岐にわたって、いろいろなアプローチをしているボランティアグループやNPOはたくさんあります。だけど、それがどういふ部分を担っているかとか、何が大事だと思っているかとか、そういう運動的視点をちゃんと言い合えることが大切だと思っています。自分たちの腹に落とし込む作業というか。

織田 最後に、これからボランティアをしようと思っている人や今活動している人へのメッセージを。

渡辺 きっかけは何でもいい。動機なんてかっこよくなくてもいい。入口は何でもいいんだけど、自分で考えてやってみて、感じて、また考える。それをひとりではなくて、一緒に活動する仲間と考えると、次の一歩につなげてほしいと思います。自分の一歩を大事にしてほしいなと思いますね。

中村 私はボランティアをやる人も社協職員も、やっぱり主体形成かなと思うんです。仕事をするにしても、ボランティアをするにしても、自分を持たないといけない、流されるんじゃないかなと。それが「オレ流」であっても、「中村流」であってもいいと思うので、自分はこうありがたいという風なものをもっていてほしいなと思いますね。

PROFILE

黒川 さくら

2016年、ボラみみ編集スタッフに加入。2017年3月名古屋学院大学卒業後、青年海外協力隊に参加。8月より日本語教師として中華人民共和国黒竜江省にあるハルビン市朝鮮族第一中学へ赴任。2019年7月までの約2年間、同校の中高生に日本語及び日本文化を教える。



中国と朝鮮族と、ときどき日本文化

私の活動地域は、中国の最北端に位置する黒竜江省の省都です。ハルビン市と呼ばれるその省都は、日本でいう県ほどの大きさがあり、バスで1時間、3時間乗ってもまだ市内です。そして、その一角に朝鮮族集落があり、その朝鮮族第一中学で日々活動しています。夏は35度、冬はマイナス35度まで下がる厳しい環境のため、なかなか日本企業も進出せず、日本人は50名ほどと、面積に似合わずとても少ないです。そのほとんどが中国語を学びに来た留学生なのですが、地域で方言以上の違いがある中国語を、なぜハルビン市の大学で学ぶ学生が多いのでしょうか。実は、ハルビン市の中国語は、標準語に近く、きれいな中国語を話すと言われているからです。標準語を話さなくてはならないアナウンサーの多くは、このハルビン市出身だと聞きました。

こんな大きな市の一角で、私は日本語教師として活動しています。私は生徒たちに、日本語を好きに、日本文化を好きに、そして日本を好きになってもらいたいと思いながら、日々さまざまな活動を考えています。

作文の授業では、書き言葉と話し言葉の違いを教えたり、中国語の影響から熟語で硬

い表現になりがちな表現を、柔らかい日本語表現に変えたりし、どうしたら日本人らしい作文になるか指導します。しかし、私が一番大切にしていることは「書きたくなる作文案」を出すことです。外国語で長い文章を書くのはとても大変です。なので、学生は作文が一番苦手だと言います。そんな学生はよく、「何を書いたらいいのかわからない」と言います。そこで私は、教科書で旅行計画の日本語を学んだら、「私にハルビン市を案内するなら?」「友だちと冬休みに旅行するなら?」など身近なことに置き換えてアイデアを聞き出し、作文に書いてもらうようになっています。少しでも、「伝えたい」、「書きたい」そんな意欲を引き出せたらなと思っています。

授業以外では、料理教室や日本人交流会を行ったりしています。生徒とおにぎりを作った日のことです。以前にも授業で作ったことがあると言っていたが、今回は、手を水で濡らして、塩を手に揉み込んで作りました。そうしたら生徒は、以前はビニール手袋をしたし、塩はなかったと言って驚いていました。また、具は何にしようか迷ったので、ツナ缶とマヨネーズでツナマヨにしたところ、初めての具に興奮してくれ、また作りたいと言って来ています。

中国の学校では、小学生の時は基本、国語と数学しか科目がなく、中学生に上がっても5教科以外の科目は体育と音楽くらいしかありません。高校になると、その体育や音楽すらも5教科の勉強のために変えられることが多く、机と向かい合う時間が多いです。ボランティアとしてこの地に来たからには、何か彼らのオアシス作りができればなと思い、交流してくれる日本人を探したり、学校を探したり駆け回っています。

次回も引き続き、駆け回る日々をお送りしたいと思います。(次回は7月号)



朝鮮語と中国語2か国語表記が今なお残る町



初めての顔おにぎり